

# 櫻五

近畿特輯号



和歌山城  
施工、奥村組

1959-16

日本大学工科校友会

〔表紙写真の説明〕

和歌山城について

和歌山城は天正13年(375年前)豊臣秀吉が紀伊の国の鎮定を志して、その子秀長に紀伊・和泉の2国を与え、その居城として吹上の峰に創建したのである。その後慶長5年浅野幸長が城主となったが、元和5年徳川家康の子頼宣が紀伊・伊勢55万5千石を領して入城し、元和7年城かくの規模を拡張した。この100周年余りその威容を誇ったが、弘化3年落雷のため全焼した。弘化4年再建を図り嘉永3年完了し、明治に至るまで延べ14代300年間、徳川三家の居城として続いた。明治以降は和歌山公園の一部となり、昭和10年国宝に指定され、全国屈指の平山城として親しまれた。しかし昭和20年の戦災で一夜にして焼滅してしまった。昭和31年城かくの再建の機運がたかまり和歌山市はこれの再建に当たった。

工事は昭和32年6月に始まり、翌33年10月1日に完成した。総工費7千余万円である。東京工大の藤岡博士の設計監督で、大阪の奥村組の責任施工によるものである。構造は鉄骨コンクリートの3層天守と他に3隅に小天守を有し、すべて弘化4年のものに復元したのである。正面の櫓門だけは特に木造とし、内部は近代的型態をととのえ、文化品などの展示などに用い、その機能を充分発揮しうる施設である。

城の位置は紀伊平野の中央山上にあり、東北は秀れいな和泉山脈に接し、西南は海に展らけ和歌浦新和歌浦雑賀崎の国立公園地帯の絶景がつからなつて、真に雄大な景観である。

目次

表紙写真の説明..... 3

桜工近畿特集号発刊によせて..... 大阪支部長 小 河 吉 之 助..... 4  
高工建築昭2卒 大阪市建設局学校建設部工事課長

大阪市学校建設の歩み..... 学部建築昭10卒 西 村 栄 一..... 5  
奈良県道路課

大台の原有料道路建設にあたって..... 村上元男 梶谷 浩..... 6  
月本道路公団大阪本社

自動車航送船可動橋について..... 高工土木昭25卒 桑 野 力..... 8  
ウエルポイント工業株式会社

よもやま話..... 大阪支部長 小 河 吉 之 助..... 9  
大阪市立大学講師

最近の住居研究について..... 学建昭10卒 野々村五四男..... 11  
別子建設KK和歌山出張所長

紀の川給合井堰工事概況..... 高工土木昭13卒 田 中 和 夫..... 12  
宇部興産KK大阪出張所

セメントについて..... 学部機械昭16卒 林 秀 雄..... 14  
ウエルポイント工業株式会社

ウエルポイントによる沈下量..... 高工土木昭5卒 十 時 莊 吾..... 15  
工学部土木昭31卒 大 浦 弘 夫

大阪の建築行政について..... 大阪府建築部・学部・ 森 壺..... 21  
建築・昭23卒

日本住宅公団大阪支所の紹介..... 住宅公団大阪支所用地課 橋 本 忠 保..... 21  
長・専工・建築・昭13卒

ドイツ連邦共和国の片鱗..... 新三菱重工業KK神戸造船所造機設計部 上 島 市 太 郎..... 23  
学部機械昭10卒

和歌山市工業用水道について..... 和歌山市水道局次長 沢 田 利 夫..... 25  
学部土木昭9卒

住宅問題と人..... 滋賀県土木部建築課係長 山 本 藤 雄..... 25  
学部建築昭20卒

花 時 計..... 専工建築昭7卒 景 山 正 明..... 26  
神戸市建築局建築課防災係長

雑 感..... 学部建築昭19卒 増 本 研 太 郎..... 26  
神戸市建築局建築課係長

和歌山県観光案内..... 和歌山県支那事務所 津 村 利 治..... 27  
学部機械昭28卒

須磨水族館..... 神戸市交通局営繕課営繕係長 大 内 茂..... 29  
学部建築昭12卒

としのせい..... 関西電力KK建設部建築課長 原 田 守..... 30  
学部建築昭8卒

鰻魚の誤まり..... 助 教 授 穴 沢 一 郎..... 31

ヨーロッパ各国の薬系大学を訪ねて..... 助 教 授 石 松 新 太 郎..... 32

会員消息..... 35  
土木部会報、近畿機械科出身者の集いの模様、和歌山県支部近況、奈良県校友便り、大成建設校門会大阪支部だより、京都の校友について、茨城県支部だより、会員異動

編集後記..... 42

1959

VOL. 4 No. 15

日本大学工科校友会誌

日大本学工科校友会

編 集 委 員

委員 長	筒 井 助 幸	幸 郎
委員 幹事	亀 井 幸 次	治 順
委員	伊 藤 真	郎 徳
"	大 内 一 育	茂 恒
"	大 穴 宮 川	下 林 恒
"	小 宮 本 小	野 武 寛
学生 委員	小 林 大	野 寺
"	小 野 寺	
"		

桜 工 第16号

昭和34年7月5日 印刷  
 昭和34年7月10日 発行

編集人 藤 田 実  
 発行人 高 木 政 司

東京都新宿区市谷加賀町一ノ十二  
 印刷所 大日本印刷株式会社  
 東京都千代田区神田駿河台一ノ八  
 発行所 日本大学工科校友会  
 電話東京(29)代表7711~9番  
 振替口座東京162710番

# 桜工近畿特集号発刊によせて

校友会大阪支部長 小河吉之助

昨年10月に桜工の編輯委員であり、旧友である亀井幸次郎君が社務も兼ねて来阪の折、大阪市役所の伊藤弘君(建築局学校建設部設計課第一設計係長)、竹口信夫君(建築局建築課北方面係長)等と食事をともにした。その節亀井君より桜工の近畿特集をやってくれないかとのことであった。私はかねてから校友がもっと近しくならないかと考えていたので早速大阪支部の役員会を開いて、とも角引うけることにした。然し実際に編輯するとすると、色々の故障にぶつかってなかなか思うにまかせない。今度編輯されておる委員達の労苦の一端が判った様な気がする。



わが校友は全国的に網を張っており、官公署に民間有力会社に重要なポストをしめておることは論をまたない。商工都市である近畿にはおそらく2000人以上の校友が散在しておることだろう。さて誰が何処で何をしているのかと聞かれても判らないのが残念に思う。

われわれは決して学園を作ろうと言うのではないが、校友のポストが判ったら仕事の面、技術の面で助けあうことが出来たり、どんなに今より有利になり又お互の向上に益することだろうと考えさせられる。時代は違っても同じ釜の飯を喰ったことが何か一脈相通ずるの必要さを感じさせる。

私が学校を出てからすでに30有余年を経過した。クラスメートにあっても誰だか判らないことと思う。せめて本号で校友の消息の一端を知って戴ければ幸甚と考える。

年をとるに連れて仕事の面も同じように進歩していたらみんな偉くなっておったことと思はれ過ぎた年月が惜しい。若い校友諸君は私の二の舞を踏まないように年とともに研さんして戴きたい。

亀井君も大阪におられた頃はハンサムな青年であったがもうあたまも白くなり顔のしわも多くなって来たのが目立つ然し校友会のことを考へると亀井君のことが頭に浮ぶ。それは外でもない彼が大阪に来て建築だけの桜建会を始めただからだ。たしか昭和12年頃であったと思う。その当時大阪府庁におられた景山君(現神戸市建築課長)や森口君(現福岡県営繕課長)や亀井君が中心となり毎月会をもつことになり「25夜会」と名付けて毎月25日に当時の心斎橋の森永スターに集ることになっていた。しかも昭和18年頃迄続いたことだろう。

それが大東亜戦争のために中断された戦後21年5月に又建築のみの会が出来た。

各県で各科の部会が活発に活動し始めたのもこの頃からであろう。

昭和23年頃と思うが全工科を一元とした近畿工科校友会の発足を見、それから京都・兵庫・和歌山・各県逐次支部の結成を見て日一日と成長しつつあることは喜ばしい限りである。

未だ会員数の少い滋賀、奈良も近く支部の結成を見るであろう。

出来ることなら各地区別ブロックを結成してブロック内の校友の親睦を計りたい。

本号を発刊するについても本部編輯委員会の数回にわたる会合。又近畿各支部役員の数回の打合せ会、等色々と御苦勞をかけた役員の方々、特に本編輯に当られた池田達雄君の並々な御努力、本誌に玉稿を戴きました諸兄広告の掲載を御承諾願った諸会社に紙上にて厚く御礼を申し上げます。

(高工・建築・昭和2年高建6回卒 小河建築設計事務所長)

恩師と一歩をともに  
田後の農展を祈る  
昭和二十七年八月  
小河吉之助

## 編 輯 後 記

ようやくの思いで近畿特輯号の編輯を終った。珍しい企画で関係者一同大いに馬力をかけたが、まず原稿の集りが思う通りに進まず、日がたつばかり。八方に呼びかけたら、いよいよ編輯に当って予定頁を上廻ってしまって、之また困わくの一因となった。近畿の空気を充分出したく、地方色をもった地方校友の活躍ぶりを表わしたかったが、それも出来ず、一部割愛したり、遂に没にせねばならなかったものも出来てしまい、誠に不手際なものとなり折角ご投稿頂いた校友に申し訳ない次第です。何れこれ等については、本部と打合せて他日善処したく思っています。御寛恕を願う次第です。終りに編輯に直接関係された各位を列記して謝意を表します。

土木・沢田利夫、磯尾汀一、建築・池田達雄、牧野源次、橋本雅之、機械・宮原孝夫 其他の諸氏。

本部として特に池田達雄君を中心とする近畿の各委員諸氏の献身的御努力を感謝申し上げます。(T. I 生)

本号は近畿特集号として編輯された為に多数の学生会員諸君の手持原稿を次号(17号)送りとしました点悪しからず御了承下さい。次号には34年度総会記事を掲載の予定。(M. F 生)